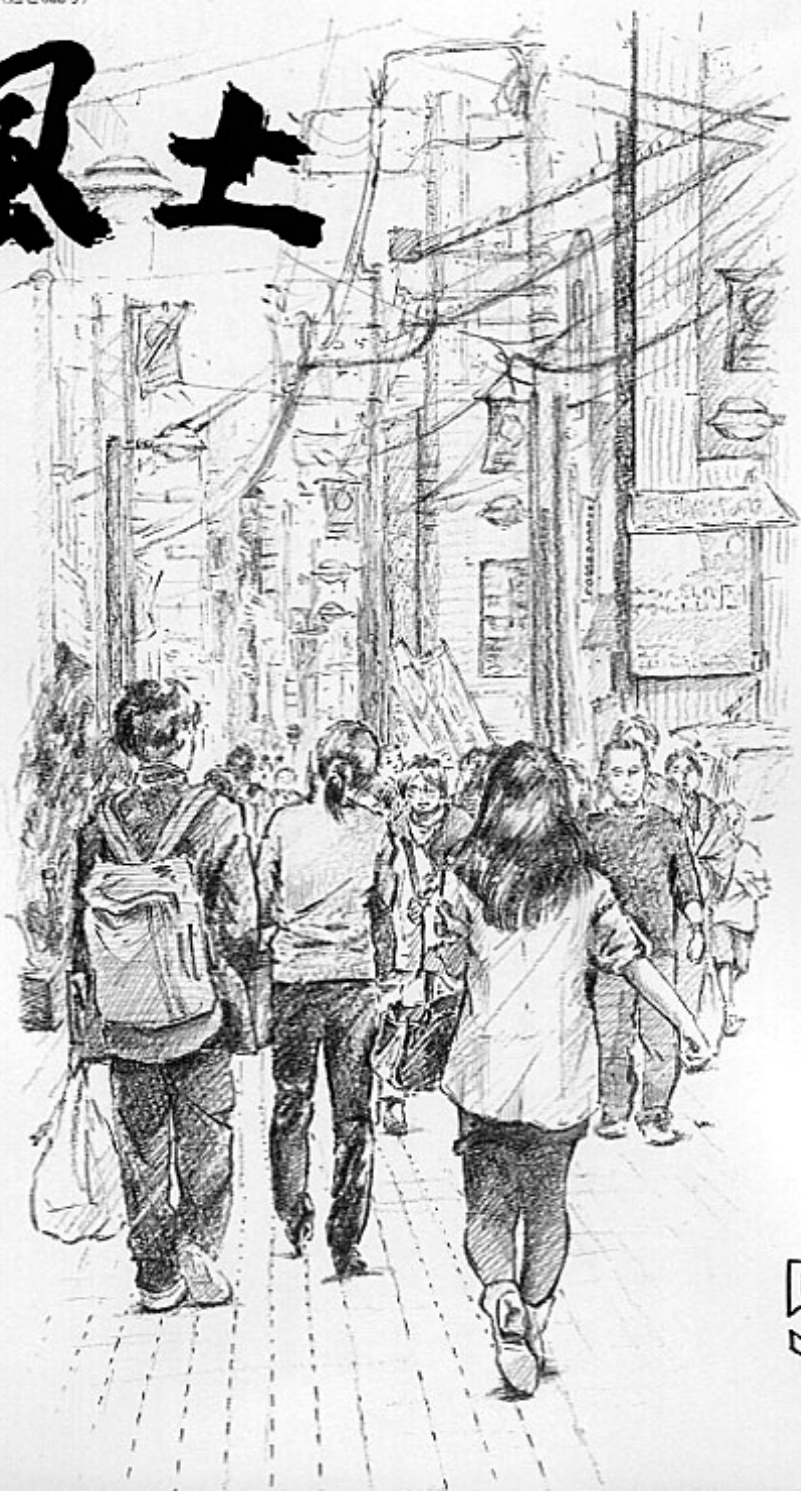


昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成23年5月5日発行(毎月5日1回発行)  
第51巻5月号(通巻622号)

# 風土



5

卒業歌  
神蔵器

春雷の一つは天に一つ地に  
かがなべて七国山や鳥雲に  
初蝶と同じ生れの東京都  
禁色のくれなゐかくす牡丹の芽  
声高のこゑに牡丹の囲ひ解く

わが熱き白息をもて稿をつぐ

雀化して蛤となり良寛忌

太陽を一つとりここに蝮の道

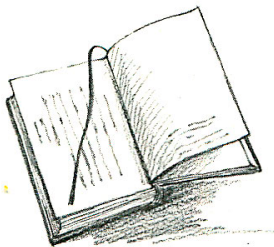
ものの芽のほぐるる雨となりにけり

恋猫の出てゆく闇や余震なほ

良寛の「天上大風」椿咲く

東日本大震災

瓦礫より小学児童の卒業歌



# 竹間集

同人作品



義仲忌

宮川みね子

草萌えてくれなぬの橋渡りけり  
直哉旧居名残の井戸や春の雨  
義仲忌竹の触れあふ音の中  
切りし爪畳に残り冴返る  
きさらぎの茶筌の先のうすみどり  
下萌や軍鶏一歩づつ胸反らし  
紅梅や濃き墨すぐに乾きをり

濠普請

浜福恵

恋告げて城址の松の鴉かな  
三の丸広場を過ぎる春日傘  
普請場の巨石を展げ城の春  
鳥交る長びく城の濠普請  
デカンシヨの野や豊鑠と野焼びと  
燭ゆらぐ雨水の杜の観世音  
猫の目の妖し踏絵のむかしより

雛飾る

鈴木とおる

春の野に仕事はじめの煙立つ  
白鷺の拾ひ歩きや春の川  
沈丁の辻を左へ三軒目  
春めくや先づ無住寺に風を入れ  
隣まで眉毛に乗せて春の雪  
小宇十戸「鈴木」ばかりの初の午  
雛飾る遺影の妻の眼の中に

かげろふ

外川 玲子

しなやかに猫の入りたる臙かな  
かげろふの果てまで歩む靴を買ふ  
啓蟄の木の洞にある暗さかな  
梅をはるころの母の手あたたかし  
それきりとなりし出逢ひや花衣  
梅若忌耳より冷えてゆきにけり  
春めくや駅の北口開店す

早 春

山田 暢子

凍滝へ一番前へ出て仰ぐ  
蘇る声あり白き梅ひらく  
春の雪来てすぐ帰る女客  
春浅し畑の中の通学路  
生き過ぎを嘆かれてをり蜆汁  
春浅し貝の形にパンを焼き  
梅ひらく納骨の日となりにけり

水温む

門 伝史会

雪のひま青空のまま暮れにけり  
春めくや皇居を臨む美術館  
残し置く葱に降り積む春の雪  
合格は旅立つきざし草青む  
きさらぎの風に越されて野を歩く  
弁財天に美人証明水温む  
末黒野や坂東太郎の太流れ

「淡交」以後(二十九)

野沢しの武

菰巻くに取りのこされて花八ツ手  
着膨れを喪服にをさめ師と会ひに  
念ふに師の遺稿  
極月の葬りの数に友はた師  
曇天の影を持たざる冬至の木  
潦 残る 田面や冬の雲  
昭和遠し霜焼の子のもうをらず  
生きてゐることにも疲れ真鱈汁

ペンペン草

— 相沢有理子 —

とど松の霧氷かがよひ風鳴れり  
一寒灯吊るす馬房の藁匂ふ  
軒氷柱居酒屋占むる旅行客  
草食系子が雪搔きぬ眩ゆき日  
雪吊りに池畔きらめき祖母の里  
春暖灯ほどよきほむら荘暮るる  
廃校の机そのまま冴えかへる  
春雪霏々熊笹揺らぐけものみち  
ペンペン草夕べそぞろに疎水べり  
ビル街を貫きし川柳絮とぶ

# 山河集

同人作品



神蔵器選

とりどりの納め待針屋の月  
亡き母の着丈四尺針供養  
銅山の坑口辛夷あかりかな  
わかさぎや氷五寸の下の息  
梅の香や一機一台男帯

小林和子

雲が雲越す羽の盆地雪止まず  
太陽を隠してしまふ雪女  
雪折れの松の齢の百余年  
雪を搔く出番非番の無かりけり  
あかときや氷柱に撥ねる時の鐘  
如月や句碑をはみだす兜太の字  
手を入れし木の周りより冴返る  
土塊に濡れてをりけり春の雪

森屋慶基

根岸善行

紅梅に濡れ白梅を仰ぎけり  
春の雪持病出でたり隠れたり  
白魚の金輪際のをどり食ひ  
如月の風のまことに打たれけり  
寒月や突つ立つてゐる竹箒  
白鳥に亡我の刻のありしかな  
名草の芽角つき合はす牧の牛  
ダイヤモンド婚は雪かの時も雪  
海へ向く道真つ直ぐに聳ちにけり  
綺麗好き英軍墓地や風光る  
手に乗せて糸底ぬくき野点かな  
葉づたひに落つる椿や実朝忌

菅原末野

井口光石

◇特別作品抄◇

## 航跡

近藤幸三郎

公園に鳩の頷く日永かな  
鷗舞ふ横浜スカーフ風光る  
一筆に描く花文字春の夢  
ドラム打つマドロス人形朧かな  
突堤を洗ふ航跡花日和  
ハイボールの氷崩るる春の雷  
花冷えのベンチに残る週刊誌  
冴え返る唐三彩の若駒に  
三塔を掠め一羽の初燕  
ミモザ咲く窓にハーレムノクターン



# 風土独語／神蔵器



梅の香や一機一台男帯

小林 和子

男帯に注目した。男帯は男子の用いる幅の狭い帯で、兵児帯もあるが、主として角帯である。長さ一丈五寸、幅六寸余の帯地を二つに折って、仕上がり幅三寸五分といったところである。

「一機一台」は、一台の機織機に一本の男帯が編まれていることで、当然、手織機であろう。

今日、そんな人が居るだろうかと思うかも知れないが、紋織、博多献上の最高の帯を好む旦那衆、粋人がいてもおかしくない。或いは機屋の老主人が生涯の思い出に、自ら極めた男帯の美と粋の高貴を織っているのかも知れない。白梅のほのかな香りがどこからともなくただよって来る。

太陽を隠してしまふ雪女

森屋 慶基

雪女・雪女郎は雪国の夜に現れる幻想譚であるが、この句は屋間の雪女である。

ほんの一刻、晴間を見せていた太陽もかくれ、あたりはたちまち夜のように暗くなった。こまかい黒い雪が降り出し、刻一刻激

しさを増し、この世のすべての音を消し、霏々と降り、しんしんと積ってゆく。

これは一瞬の変化であるが、雪国では珍しいことではない。そして、こんな時には雪女が現れるのだ。黒い雪が降りしきる屋の闇の中に、地上につもっている雪の白さに反映して、雪女だけがうつつに映し出される。

吹雪の夜の雪女、冬の満月の夜の雪女はことにおそろしいと言われるが、昼間の闇の雪女は、一番おそろしいかも知れない。

土塊に濡れてをりけり春の雪

根岸 善行

龍太先生は、いい句に出会おうと、一瞬微妙な手応えをおぼえるものである。それは釣りの魚信に似て、有無をいわせぬ強引な引きを見せる作品があるかと思うと、やさしく繊細なあたりを感じさせる作品もあるというのである。掲出句はまさにやさしく繊細なあたりを感じさせるいい句ではなからうか。

一面に銀世界である。雪がやんで、一番先に一際突出した土塊の雪がいち早く融け出し湿りをおび濡れてくる。間もなく黒々とかがやく土塊が待望の肌を見せるであらう。やさしく繊細なあたりであるが、えものは大きい。

(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

魚は水に南部鉄瓶鑄型解く 川崎

山本浪子

陸奥や風の形せし軒氷柱

風光る蛭ヶ小島は畑の中

身の芯のゆるむに任す春の風邪  
一盛のいづれもいびつ冬りんご

高槻

浅田光代

恋猫のゆくやけだかく尾を立てて  
冴返る友の形見の『山月記』

春の風邪地に降るものを見てをりぬ

啓蟄や富士山側を予約して  
紅梅や水の光りの長屋門

津山

生田恵美子

水底の泥に杭立つ日永かな

わが影に容れてめだかの数かぞふ

瞳の大きぬり糸の少女春の風邪

そこに尾の見えて囁つづきけり

陶土搗く水車の音やふきのたう 静岡

菅原末野

自分史のゲラ刷り上がる冬木の芽

ふところに春の雪積む鬼子母神

あたたかや本のとびらの手漉和紙  
真先に麒麟の首へ春の風

佐倉

松崎雨休

露の臺割つて地上は風ばかり

春シヨール靡かせ銀座四丁目

春一番スカイツリーは風の上

東大に雪降りしきる大試験  
朝粥に母の菜の花芥子和へ

東京

遊橋恵美

母がゐる母の歩幅に暖かし

雪しまきピリオドのなきメツセージ

氷湖ゆく恋を試してピンヒール

冬牡丹昨日に今日を重ねけり  
春夕焼チヨコレイト色に告白す